

Wh-節の用法についての再考

－Jespersen(1924)の「3階層(The Three Ranks)」理論に依拠して－

ココネ言語教育研究所

佐藤芳明

はじめに

Jespersen(1924)は、英語の文法を捉えるのに有効な装置として、「3階層(the tree ranks)」という理論を導入している。前提として、junction(修飾関係を包括的に捉える概念)とnexus(主述関係に注目する概念)の2軸が想定されており、その双方に3階層は適応可能としているが、ここではjunctionに適応される3階層についてみてみたい。注目に値するのは、この3階層の捉え方が語のレベルのみならず節単位を含むword groups(語のまとまり)にも適応できるという点である。この理論をひもとくことによって、英語の節情報をより分かりやすく・使いやすく提示する方法を探るためのきっかけを得ることができるのではないか。以下、Jespersen(1924) *The Philosophy of Grammar* のChapter 7. The Three Ranks(pp.96-107)の内容に沿って記述を行う。

3階層の例

まず、junctionに適応される3階層の語レベルの例として、*extremely hot weather* があげられている。これは、*weather* が主要な問題(primary)であり、それが*hot*によって制限され(secondary)、それが更に*extremely*によって制限されている(tertiary)、と捉えられる。この第1から第3の各階層に対して、I) primaries; II) adjuncts; III) subjunctives という呼称が当てられている。

これは品詞で言えば、「名詞」「形容詞」「副詞」と対応する。しかし、品詞分類とセンテンス上の機能は常に一致するわけではない。生きた文法として捉える際には、上の「3階層」という発想が効力をもつのである。例えば、*He didn't stay for long.* や *He's only just back from abroad.* あるいは *He left there at two o'clock.* における下線部は品詞としては副詞だが、文中では第1階層で(名詞的に)使われていると捉えられる。また、*absolutely novel* → *absolute novelty*; *utterly dark* → *utter darkness* 等の「副詞+形容詞」→「形容詞+名詞」の品詞変換も、階層上のシフト「III+II → II+I」として捉えることができる。さらに、不定詞のいわゆる3用法も、*to do* という言語形式が3つの階層でそれぞれ使用されていると理解することが可能である。

To see is to believe. (I); *in times to come* (II); *He came here to see you.* (III).

(Jespersen 1924: 100)

この不定詞自体、word groups の例とみなしてもよいと思われるが、Jespersen(1924)では、動詞(Verbs)の「定形動詞(Finite forms of verbs)」に対する「Infinitives(不定詞)」という位置づけで捉えられている。

語のまとまり (word groups) ・節における3階層

この3階層の発想を word groups に適応するとどうなるか。分かりやすい例として、以下があげられている。

Sunday afternoon was fine. (I)

a *Sunday afternoon* concert (II)

He slept all *Sunday afternoon*. (III)

(Jespersen 1924: 102)

この種の例から、3階層の捉え方は、「語」単位から「語のまとまり (word groups)」にいたるまで汎用性があることが確認できる。しかし今回、「3階層」に注目する最大の理由は、この発想が節情報にも応用可能であるという点にある。そして、これは文法用語を中心とした用法分類を旨とする従来型(説明中心型)の文法とは違って、表現者の視点からみた文法を構築する際に、ひとつのヒントを提供する視座であるとも思われるのである。以下、節の用法で3階層に対応するとされる例を引用してみよう。

I. Clauses as Primaries (clause primaries).

That he will come is certain.

Who steals my purse steals trash.

What you say is quite true.

I believe *whatever he says*.

I do not know *where I was born*.

I expect (*that*) *he will arrive at six*.

We talked of *what he would do*.

Our ignorance of *who the murderer was*

(Jespersen 1924: 103)

II. Clause as Adjuncts (clause adjuncts).

I like a boy *who speaks the truth*.

This is the land *where I was born*.

(Jespersen 1924: 104)

III. Clause as Subjuncts or tertiaries (clause subjuncts).

Whoever said this, it is true.

It is a custom *where I was born*.

When he comes, I must go.

If he comes I must go.

As this is so, there is no harm done.

Lend me your knife, that I may cut this string.

(Jespersen 1924: 105)

上の例を見ると、第1階層(一般に名詞節とされる)では、**wh** 節と **that** 節が、第2階層(一般に形容詞節とされる)では、**wh-**が導く関係詞節が、そして、第3階層(一般に副詞節とされる)では、種々の接続詞が導く副詞節が生じていることが分かる。第2階層に、関係詞 **that** を使った例を含むことはまったく問題ないと思われる。ところで、興味深いことに、**where** 節では3階層を一貫して全く同一の語句からなる節 (**where I was born**) が例として挙げられている。以下に改めて併記して比較してみよう。

I. I do not know *where I was born*.

II. This is the land *where I was born*.

III. It is a custom *where I was born*.

従来の文法指導では、これらの節は以下のように説明される。I の **where** は疑問(副)詞で、**where** 節は間接疑問の名詞節である;II の **where** は **the land** を先行詞とする関係(副)詞で、**where** 節は関係節となる形容詞節である;III の **where** は接続詞で、**where** 節は時の副詞節である、と。これに対して、これらの節を3階層の発想で捉えたらどうなるだろうか。これは要するに、”**where I was born**” という同一の **word group** が、I~III の各階層でそれぞれ使われているということになるのではないか。文法用語による分類を前提に考えれば違和感が生じるかもしれない。が、それは先入観として定着してしまっている可能性がある。言語使用の実相としてみれば、不定詞の **to do** にも3階層の各用法があったように、**where** 節にもそのような柔軟な用法の広がりがあると考える方が自然なのではないか。補足説明の意味で、以下、上の **where** 節を含む3つの例をチャンク単位にかみ砕いて分析してみよう。

I do not know わからない

where I was born 私がいつ生まれたのか(ということ)

(→ **where was I born(?)** の nominalization(名詞化)と捉える)

This is the land これはその土地です

where I was born それはどこか(どんな場所か)というと、私が生まれた

(先行詞+**where** で、「どこか」についての追加情報を加えている)

It is a custom それは習慣だ

where I was born. どこでかと言えば、私が生まれたところでは

(→ where 以下で、主節の内容に対して、「場所の状況設定」をしている)

こうしてみると、「名詞節」「形容詞節」「副詞節」でそれぞれ異なる用語をあてがわれていた where が、実のところ、where(どこか)という未知情報をめぐって、それが第1階層、第2階層、第3階層で、文脈に応じて柔軟に使われているという捉え方が可能になってくる。もしそうであれば、用語を覚えて分類整理をするという作業から、以下のような英語表現者としての意識を育むという営みへシフトしていく必要があるのではないか。まずは、英語節情報の基本的なストラクチャーをしっかりと定着させる。次に、与えられた文脈から判断して、今、自分は「第一階層」で主題を示そうとしているのか、「第二階層」で名詞に対する情報追加を行おうとしているのか、あるいは、「第三階層」で副詞的な状況設定をしようとしているのか、そのことを自覚しつつその節を使いこなしていく。

他の wh 節に応用してみる

上の発想に従って、where 以外の wh-節について、用法の幅を見直してみよう。以下、例文は、『E-gate 英和辞典』からの引用である。分析の便宜として、wh-を語単位で強調し、wh-節の全体を括弧でくくり、先行詞をもつ関係詞の場合には先行詞に下線を施してある。2-5 の括弧内に示すローマ数字は3階層との対応における分析である。

1. *When* is the Independence Day?
2. I didn't know [*when* Elena left here]. (I)
3. I will be a college student in the year [*when* the next World Cup is held]. (II)
4. I was busy last fall, [*when* I went to the driving school after work]. (II or III)
5. Around midnight is [*when* I'm wide awake]. (I)

これらの when の用法についての従来の説明はこうである。1の when は疑問文を導く疑問(副)詞、2の when は疑問(副)詞で間接疑問の名詞節を導く、3の when は関係(副)詞で関係詞(形容詞)節を導く、4の when は関係(副)詞で、非制限用法の関係詞節を導く、5の when は先行詞 the time が省略された関係(副)詞である。一方、3階層の発想で捉えれば、2(I), 3(II), 4(II or III), 5(I)という具合に捉えることができる。例文4と5については説明を要する。5については、一般に、先行詞の省略と捉えられているが、なぜ the time のような名詞が省略されるのかその動機が不明である。むしろ、Around the midnight も第1階層で主題として取り上げられたところに、when I'm wide awake も第1階層として(名詞的に)呼応しているのではないか。つまり、2の when を理解するのと同様のアプローチで5の when が理解できるのである。そのとき先行詞の有無など考慮する必要さえ生じないというメリットもある。4を II or III としたのは、いわゆる非制限用法を考慮したものである。制限用法であれば、先行詞に対する関係詞節は長い名詞チャンクの一部として組み込まれる。一方、

非制限用法では、カンマの前でいったん短い名詞チャンクが成立した後で、補足情報が（ある意味、副詞情動的に）足される感じになる。その意味で、節としてみたときに、形容詞節と副詞節の性質において相半ばする感覚があり、それが文字では句読法に、音声ではポーズのとり方に現れるということである。

次は why の用法で確認してみよう。

1. **Why** ever did you talk like that?
2. I wonder [**why** he said so]. (I)
3. Is there any particular reason [**why** you don't like them]? (II)
4. That's [**why** we moved to Tokyo]. (I)

4のみ説明しよう。これはしばし、**the reason why**の先行詞(**the reason**)が省略された関係(副)詞と説明される。しかし、3階層で捉えれば、第1階層で(名詞的に)使われているのであり、用法としては2と同様に捉えることが可能である。That's the reason why...であれば、その **why** 節はもちろん第2階層となるが、それは3の用法と通ずるものである。

以下、**how** の例である。

1. **How** did you fix the camera?
2. He told me [**how** he solved the problem]. (I)
3. That's [**how**I knew that he was a lawyer]. (I)

3のみふれる。この **how** も関係副詞と呼ばれることがある。が、現代英語では **the way how** という表現がないことから、**how** が先行詞を取ることはない。すると、実際の **how** 節の用法は、常に、第1階層で(名詞的に)使われることが分かり、上記例文2と3で、異なる用語を使う必要は生じないということになる。

-ever の用法について

Jespersen(1924)から引いた節の用法のうち、第1階層で **whatever**, 第3階層で **whoever** の例が含まれていた。以下、**-ever** の節について確認してみよう。

1. [**Whatever** you say], I won't change my mind. (III)
2. The quality will be the same, [**whichever** of them you choose]. (III)
3. [**Whoever** says so], it is wrong. (III)
4. [**Whenever** you come], I will be waiting. (III)

5. [**Wherever** you go], I'll go with you. (III)
6. We have to stay awake, [**however** sleepy we get]. (III)

これら wh-ever の節は句読法からみても分かる通り、副詞節(いわゆる譲歩の副詞節)を形成している。wh-ever を no matter wh-に置き換えるとより口語的な響きが生じるが、意味的に大きな差は生まれない。これらはすべて、第3階層の用法である。だが、wh-ever 節には以下のように名詞節を導く用法もある。

1. You can do [**whatever** you want to].(I)
2. Take [**whichever** you want]. (I)
3. [**Whoever** walks around in such heavy rain] will catch a cold. (I)
4. You may invite [**who(m)ever** you like]. (I)

つまり、wh-ever の節はすべて譲歩の副詞節を作れるが、whatever, whichever, who(m)ever については疑問代名詞から生じた ever 系であるために、名詞節を導くこともあるという具合に理解できる。上の例は4つとも、第1階層の用法である。確認までに記すと、wh-ever には、第2階層の用法はない。つまり、先行詞をもつ関係詞としての用法はないということである。一般に、この語形は「複合関係詞」と呼ばれているが、言語使用を促すわかりやすい用語とは決して言い難い。

名詞節を導く what と who の比較

Jespersen(1924)による節の例のうち、第1階層に what と who を含む例があげられていた。以下、改めて、2文をピックアップして比較してみよう。

[**What** you say] is quite true.

[**Who** steals my purse] steals trash.

この what は馴染み深いものであるが、その説明の仕方が大きな問題を孕んでいる。一般にこう言われている。「この what は先行詞を含む関係代名詞で名詞節を導く(what は the thing which に言い換えられる)」と。しかし、このような迂遠で分かり難い(また実感を伴わない)説明をしなくても、3階層で捉えれば、第1階層で(名詞的に)この what 節が使われているに過ぎないのである。その基本的な理解のし方は、関係疑問の名詞節の場合と変わらない。そう捉えることで、本来存在しないはずの先行詞の有無についてもわざわざ考えたりしなくてすむのである(what には the thing which では表せない語感があるということである)。では、who の方はどうか。これも、第1階層で(名詞的に)who 節が使われていると捉えることができる。what 節と合わせて、噛み砕いてみよう。

[**What** you say] あなたが何を言うか → あなたが言うこと

is quite true. まったくそのとおりだ

[*Who* steals my purse] 私の財布を盗むのは誰か → 私の財布を盗む人
steals trash. クズを盗む

教科書的にはあまり扱われていないこの種の *who* の用法は、実際には枚挙にいとまがないほど出てくるものである。以下、その例を、足してみよう。

1. This is [*who* I am].
2. It's OK to be [*who* you are].
3. Be [*who* you are] and say what you feel.
4. [*Who* you are] is written on your face.
5. Ninety-nine percent of [*who* you are] is invisible and untouchable.

上の5つの例にはすべて *who* 節が含まれているが、いずれも第1階層の用法として捉えることができる。

おわりに

今回は、Jespersen(1924)の3階層理論から、*wh* 節の捉え方について見直してきた。いくつかの教訓が得られたように思う。以下、言語分析的な観点に絞って、要点を整理しておきたい。まず、*wh*-の機能語自体に注目してその用語分類を行うよりも、むしろ、節全体の働きに目を向ける必要がある。その節全体が、第1階層から第3階層のどのレベルで使用されているのかを意識して、*wh*-語自体の分類には拘泥しないという発想である。これは、*wh*-語における文法用語として一般化している疑問詞と関係詞という用語分類の有効性自体に揺さぶりをかける可能性も孕んでいる。関係詞の先行詞問題について言えば、「先行詞を含む」というのは言語形式には表れない事象であるので、むしろ、先行詞は有るか無いかで還元して、先行詞がある場合には関係詞として第2階層の用法と捉え、先行詞が無い *wh*-節は第1階層で(名詞的に)使われたりするという具合に捉えることが可能である。

参考文献

Jespersen, Otto. (1924). *The Philosophy of Grammar*. The Norton Library: New York.

田中茂範・武田修一・川出才紀編(2003). 『E-gate 英和辞典』. ベネッセコーポレーション.